藻類 Jap. J. Phycol 31: 217-218. September 20, 1983

西澤一俊: XI回国際海藻シンポジウム（青島）委員会報告 Kazutosi NISHIZAWA: Information of International Advisory Committee of International Seaweed Association

去る6月19日から25日にわたる一週間青島でXI International Seaweed Symposium (ISS) が開催されたことは既報の通りである。このISSには，予想通りに31ケ国から計400余名（中国約150名，アメリカおよび日本からそれぞれ60-70名ほど，その他）の参加者があった。4題の合同講演，6セッション36題のミニシンポジウムと大まかにわけて3区分（有用海藻生物学約101題，海藻の化学，生化学領域約35題，海藻養殖関係約30題）計約166題の一般講演と約83題を含むポスター講演がこの間発表され，盛会のうちに終了した。

一方委員会 International Advisory Committee (IAC) すなわち ISS 運営の本体は19日から26日にわたり毎日昼食後の休憩時間および夕食後と2回づつ開かれた。そこで議せられたことや決定した事項のうち，日本藻類学会に多少なり関係していると思われることをまとめて報告したい。

［I］ ISS に関する規約の確認

1) ISS の性格と目的：ISS は International Seaweed Association (ISA) の行事として3年に1度適当な国で開かれ，1回目の (1952) Edinburgh 以来今回で11回目の開催である．ISA は International Association of Biological Oceanography (IABO) の1部門とされた。ISA の本来の目的は広い意味で応用藻学の振興にある。しかし，当面としては研究対象は海藻およびその成分にあるが，他の藻やその成分をも対象に含まれることは勿論である。従って具体的には，利用価値のあるまたはありそうな藻について，基礎的な生物学および化学の研究を促進させ，藻資源の確保とその水産環境を保存維持し，藻類の収獲，養殖その成分の加工の改良を探索することなどが当面の仕事である。

2) 会員：ISA の目的に関心を持っている人々は常に歓迎される。それで，その都度開催された ISS に正式に参加した人全員が次回の ISS まで会員としての資格をもっている。

3) IAC の構成：IAC は今後8～12名で運営するが，決定については国とかその専攻分野を考慮して IAC が選ぶ。IAC には委員長副委員長を置くが同一国からは選出しない。委員長は IABO の部外員としての資格をもつ。IAC には IAC 委員以外の者で別に定める職務をもつ秘書を置く。IAC には別に定める職務を行う実務小委員会を設ける。それは正副委員長と前委員長から成り，ISS 開催予定国の国内組織委員会と協力し乍ら実務を行う。正副委員長の職務は別に定める。

4) 国内組織委員会：IAC の中で自国で ISS を開催する場合には国内委員長を選び，委員会を作る義務がある。職務内容は別に定める。

5) その他：プロシーディングスは毎回の ISS につき有料で発行するが，その編集委員には IAC がその責任において委嘱する。ISA にこれに類似する他の組織例えば国際藻類学会 (IPS)，Marialg（業界の海藻産業振興のための組織），UNESCO, ITC, FAO などと特別な関係を保持する必要があり，IACの誰かがこれらの組織と有機的な関連をもつことが望ましい。ISS 運営資金獲得のために，当事国で賄えない時には国外募金委員会を置く。ISS 開閉会に関する具体的事項は別に定める。その他に，IACの正副委員長やIAC委員の任期などに関しても別に定める。IACには別に定める規定に従い IAC 以外の名誉 IAC 委員を置く。また次期 ISS に関しては，その開催 ISS で別に定める細則に従い決定し，その際に次ぎつまり6年後の ISS 開催予定の国についてもその際に決める。

［II］ XI ISS 会期中の主な報告と議題

1) 国外募金委員会において集められた金額は，欧米諸国において20,000$，日本から8,809$中国から若干（明確でない）であった。正規の収入は約400名の参加者の登録料とプロシーディングスの代金計約18,000$。すなわち，計46,808$のほかに中国募金ということになる。

2) Norway の Kristensen 氏(IAC の一員で今回は欧州募金委員）が IAC を辞任した。その欠員に二，三の候補者が挙げられたが，いずれ文書により IAC 間で決めることになり，この時点では IAC は10人となった。

3) IPS との関係を ISA 側ではどうしたらよいか，ということがたびたび話題に出た。Santa Barbara ISS

(IX回) 以来，IPS 創立に絡み，ISS としては，IPS とできるだけ密接な関係を保ちながら，それ自身の存続も有意義であるよう何かと苦心しているかのようにみえる。現存は，Hawaii 大学の Doty 氏が窓口となり，Canada の New Brunswick 大学の Taylor 氏や Chile の Pontificia 大学の Santelices氏(IAC の一員)などを通じて IPS の連絡を取っている。そこでまず，次回 IPS (1985, Denmark) に，ISS によるミニシンポジウム部会を設けて貰い，また逆に次回 ISS (1986, Brazil) の中にも IPS の部会を入れて貰うよう ISS 側から働きかけることなど決めた。ISS と IPS は本来の目的は違うが，内容的にはかなり重複する部分もあり，両者に参加することは，内容的にも資金的にも参加者の不便になりはしないか，それを防ぐ方法は何か，など論議された。

4) FAO の発展途上国に対する海藻資源の収獲と利用面の援助に，IAC もできるだけ応援する意見が皆の賛同を得た。FAO では有用海藻の名称と特質のリスト作製など計画している (FAO 代表として米国の Caddy 氏が説明した)。

5) IAC が，業界の Whitney氏や Stancioff 氏などを昼食に招待し，種々 ISS のあり方運営その他につき意見を聞いた際に，やはり IAC が業界のために役立つことが希望された。具体的には Marinlg 当りの希望でもあるが，海藻成分の利用限度の研究やマクロ藻養殖と収獲のための生理学も重要だし，養殖に関する相互の情報およびデータ修復機構の必要性など論議された。ついでながら，講演の中に国の政策的色彩の濃いものがあったが，そのようものは IAC で予め篩にかけるべきだとの意見が一致した。

6) 22日の委員会で，次回 ISS (1986) は Sao Paulo 大学 (de Oliveira 氏が国内委員長になるはず) で，その次のには (1989) Vancouver で行われる予定が決定された。1989 ISS は France か Chile という案も出た。次回の IAC 委員長は Norway の Jensen 氏が McLachlan 氏に代り，また副委員長は Moss 氏がなることが決った。

7) 青島 ISS の国内組織委員長の Tseng(曾)氏から，UNESCO の仕事として明年青島で養殖に関する講習会を開き，外国からも参加できるようにし，その経費は UNESCO から援助するようにする計画が発表された。また FAO との関連強化に IAC 側では委員の Delepine 氏(仏)，Doty 氏(米)，Moss 氏(米)，Tseng 氏(中)などが Caddy 氏と連絡に当ることが決った。

8) 25日以降の会議には筆者は帰国のため出席できなかったが，そのうち主なことは，今回の ISS プログラム作製 (専門的区分けなど) は満足すべきものではなく，将来は例えば生物学や化学の領域ではさらに細く区分けすべきであるという意見がでた。また ISS に学会賞を置く案も議論されたという。発表講演 116 の要旨が集ったが，そのうち68が受理され，修正，却下17件であった。Tseng 氏から今回の青島 ISS の会計につき，詳細は 1 ヶ月後に Trondheim ISA 本部に連絡するという報告がなされた。

(東京教育大学名誉教授 〒176東京都練馬区白山3-10-4)

——学 会 録 事——

1. 日本藻類学会第 7 回大会

昭和58年 7 月25～26日の両日，北海道室蘭市・室蘭プリンスホテルにおいて第 7 回大会が開催された。本大会は北海道大学理学部附属海藻研究施設50周年を記念して開催されたものである。他の記念行事については別項に記した。北海道での大会開催は初めてのことで，当初準備委員会では地理的不便さによる参加者数の減少を危惧したが，日を経るにつれて申込み数が増え，最終的には参加者111名，講演数54題 (一般講演50題，シンポジウム 4 題) となった。

大会第 1 日目，一般講演終了後に昭和58年度総会と懇親会が開かれた。懇親会には 103 名出席，舘脇正和氏司会のもとに岩本康三学会会長の挨拶，阪井與志雄大会会長の乾杯で始まり千原光雄氏の閉会の挨拶で終るまでの約 2 時間，余興のカラオケをも混じえて極めて盛会かつ豪華であった。

本大会の会場が会員の所属機関を離れてホテルに設営されたのは今回が初めてである。大会，懇親会の開催準備と運営に加え，会場設営にも多大の尽力をされた北大理学部海藻研究施設並びに植物学教室の方々に深く感謝致します。

大会参加者：秋岡英承，秋山　優，鯵坂哲朗，阿部英治，安部　守，飯間雅文，井浦宏司，石川依久子，石光真由美，市村輝宜，庵谷　晃，巌佐耕三，井鷺裕